

- 1 日 時 令和2年(2020年)7月21日(火)
- 2 場 所 宗谷合同庁舎 4階 大会議室
- 3 出席者 別添「出席者名簿」のとおり
- 4 議 題 別添「次第」のとおり
- 5 資 料 別添「R2. 7. 21 宗谷圏域障がい者が暮らしやすい地域づくり委員会」資料のとおり

6 議 事

(1) 辞令書交付

委員会開催に先立って、影山課長より委員へ辞令書の交付を行った。

(2) 挨拶

続いて影山課長が開会の挨拶を行った。

(3) 自己紹介

4月から新たに就任された委員がいらっしゃることから、自己紹介を行った。

大谷推進員：地域づくり推進員は2期目になる。

木上委員：猿払村身体障害者福祉協会と稚内身体障害者福祉協会を兼任している。今期からの就任となる。

千葉委員：地域の住民枠で2期目になる。障がい福祉事業サービスに10年くらい携わっていた。

小田桐委員：稚内市の弁護士で今期からの就任となる。

鈴木委員：猿払村社協で日常生活自立支援事業や、成年後見支援センターの業務を担当している。社協に入るまでは介護の仕事を10年ほどやっていた。今期からの就任となる。

高師委員：稚内市役所社会福祉課勤務3年目で地域づくり委員は2期目となる。

黒川コーディネーター：宗谷圏域障害者総合相談支援センターで北海道障がい者条例の支援員という位置付けの地域づくりコーディネーターをしており、今年で6年目となる。

影山課長：今年4月から社会福祉課長を拝命した。昨年4月に社会福祉課主幹として宗谷に来たが、宗谷勤務は今回が初となる。

大橋主査：今年4月から地域福祉主査を拝命した。

福祉には少々縁があったが、障がい福祉は初めてとなる。

得永主事：地域福祉係の障がいの事務は2年目となる。

宮川主事：地域福祉係に今年度から採用となった。

(4) 概 要

委員会の概要について、概要資料、資料1・2・4のとおり事務局より説明を行った。

(5) 委員欠員の補充

委員欠員の補充について事務局より説明を行った。

〈大橋主査より説明〉

現在、地域づくり委員会の委員は、「管内で生活する障がい者」が2名、「地域住民」が4名、「学識経験者」が3名、「関係行政職員の職員」が1名の、計10名の構成となっている。

しかし、今日現在、3名の欠員が出ており、委員は7名となっている。

欠員が出た経緯としては、障がい者枠の1名、地域住民枠の2名に募集をした

が応募する方がいらっしやらなかったため。

(6) 活動報告

令和元年度(2019年度)の活動報告について、活動報告資料のとおり説明を行った。

(7) 地域課題の設定

地域課題の設定に係る過去の協議の経過について、資料のとおり事務局より説明を行った。

(8) 各委員等からの意見

〈黒川コーディネーター〉

まず協議したいことの1つとして、障がい児の支援、教育と福祉の連携が、重要な課題としてある。小学校～中学校～高校～就労という流れの中で、支援がどうしても途切れがちになっていることについては、宗谷に限らず全国的な課題となっている。

支援をつなぐ取組みについては、前任の委員にも意見をいただいております、今後これについて協議していければと考えている。

地域住民との相互理解を1つのテーマとして、就労支援・相談支援も含め、障がい者に対する差別や偏見の解消等について協議していきたい。

〈千葉委員〉

地域住民との相互理解というところに、今年2月からのコロナウイルスの影響で地域住民並びに当事者の方々の生活が劇的に変わったことが、影響しているのではないかと思った。

これから先の感染予防対策の対応についても、皆が理解できるように進んでいければと思っている。

障がい者の中には、マスクが苦手な方がいたり、うまく手洗いができなかったり、街中で大声を上げてしまう方もいる。感染予防対策は必要だけれど、福祉事業者、家族、当事者、関わる地域住民のお互いが理解して、そのような方をサポートできるような生活様式を作っていくのが、今後一番の課題になってくると思う。

〈大谷推進員〉

互いに抱えている不安について相談できたり、何か声をかけたり等、その関係が大切だと思う。

〈高師委員〉

障がい児者と地域住民の相互理解について、地域福祉計画を作る際に、市内6地区で地域住民の方や学校の先生方、障がいや高齢のサービス事業所の方など色々な方が30名から40名集まり、地域の中で困っている方はどんな方がいるのか、暮らしやすい地域づくりを進めるにはどうしたらよいかというところで様々な意見をいただいた。

どの場面でも高齢者の話はかなりあったが、障がい児者については、「地域の中で、どこにどんな方がいるのか見えない。」という声が非常に多かったのが印象的だった。知ろうとしないということではなく、わからないということだった。

確かに障がいにも色々な障がいがある。目に見えてはっきりとわかるケースもあるが、例えば精神の障がいや知的障がいについてはわかりづらいケースもある。

そして障がいをもつ方の意見として、「知って理解してほしい。」ということで積極的に言える方と、「知ってほしくないから、そっとしておいてほしい。」という方と二極化されるという話も教えていただいた。知られたくないというところの根源は、学校や社会等で差別や偏見がまだまだあるから、さらされたくないという強い

思いがあるということだった。知ってもらおうということは、実際に障がいをもつ方々と話をしたりするきっかけになるのではと思う。

昨年度か一昨年度の委員会の中であった、障がい者の駐車場について、若い方に限らず、理解が足りなくて、空いているから止めてしまうということが多いのではないかと思う。特に、稚内市内は大都市圏と比べると、簡単に障がい者の駐車場スペースを使っている方がいるのではないかと思う。

今年度のテーマに基づいて色々な方の話を聞きながら、さらに考えていきたい。

〈大谷推進員〉

個別に思っていることは色々なので、話したりすることで理解が深まっていけばいいなと思う。

〈小田桐委員〉

コロナ感染拡大防止対策で自粛したりマスクをしたりすることを障がい者が理解できなくて、周りが配慮してケアしていくというのは現場ではあるのかと思う。

障がいに対する差別や偏見は根深いということで、差別的な言動なものでもなく、なんとなく住みづらさ・居づらさを感じるという点もあるかと思うが、実際の差別や偏見に基づいた事例の報告があれば、本委員会で取り上げて対策を考えるというのをできればいいと思った。

家族の方が、自分の家族に障がいがあるというのを知られたくなくて、隠してしまうというのもあると思う。難しいと思うが、その家族を説得して、地域でちゃんと受け入れるというのを伝え、また色々な支援があるということを理解していただくという社会に近づければいいと思った。

今まで意見等があって、それについてテーマを挙げて、協議して実現したというのは、最近あるのか。

〈大谷推進員〉

この委員会に参加して、凄く良いネットワークができたと思っている。昨年度の委員会に旭川技専稚内分校の職員に講師として来ていただいたこと、その方に支援をいただいて一般就労に結びついたことからお願いしたこと、学校でこういうことがあるというのを発言していただいたことなど。

現場の方しか分からないことが多いことから、学校の先生や、子どもがいる方の話を直接聞くことは大事。知り合いの方に困っていることはないかと話をしたときも、「たくさんあるけどどこに話せば良いのか分からない。」ということだった。

この委員会でもそうだが、思いついたときに学校の先生や、話せる方に話ができるネットワークはできていると思う。

〈小田桐委員〉

どこに、誰に相談ができるのかとか、関係者のネットワークができて広がれるのは大きいなと感じた。

〈大谷推進員〉

昨年度までは稚内市内の委員が多かったが、今年度は猿払村からの委員が2名いるということで、地域差はあるかと思うが、宗谷管内全体で、圏域等で話していければ良いと思う。

〈鈴木委員〉

ネットワークという言葉が出たことから感じたことだが、子どもをもつ母親が認知症になってしまったことを契機に、子どもが障がいを持っていることがわかった事例があった。また、どこに何を相談したら良いかわからないというところから福祉係に相談していただき、そこから生活保護につなげたとか、生活の立て直しがで

きたとか、民生委員さんが関わったということがあった。

誰に相談したら・どこに相談したら良いのかという窓口が大事なんだと思った。
〈大谷推進員〉

人とつながって、気軽に相談ができるというのは良い。
〈小田桐委員〉

地区ごとにいる民生委員さんは、地域のためにと思っている方がやっていると思うので、民生委員さんに対する情報提供や支援をすることができれば良いと思う。
実際に民生委員さん向けに報告する場や会議みたいのはあるのだろうか。

〈高師委員〉

稚内市は民生委員が123名いて、主任児童委員がその中に12名含まれている。3年に一度一斉改選があり、昨年12月1日から3年間の任期で新しく委員が就任したことから、市の広報誌2月号で全員の顔写真を入れて紹介している。新任の方もいることから、学習の機会を設け、福祉は幅広いことなどを学んでいただいている。

稚内市では6地区に分かれている民生委員の協議会があり、6地区から委員を選出していただき、部会を設けている。高齢者部会など色々な部会がある中の一つに障がい者部会もあるが、現実、障がいのある方に民生委員が関わっているケースはほとんどない。これが実態ということで、地域で障がい者が見えないという話につながっていく。

民生委員に相談していただくことで、民生委員が市の機関・関係機関とつながって、障がい者のためになるように行動することは間違いないことから、利用していただければありがたいと思う。

〈大谷推進員〉

民生委員は活動をしていてもそれを表面に出せないこともある。色々な相談等があれば潜在的な課題がたくさん見つかるのではないかなと思う。その課題を協議したり研修したりすることは良いことだと思う。民生委員という職務で相談できる方と、そういう職務ではないが相談しやすい方がいたら良いと思う。

〈千葉委員〉

平成18年から自立支援法が始まって各事業所の定員の増加等があり、平成24年から始まった計画相談支援の数で、障がい者の方々の地域での活動や、サービスを使う姿、住み方は、数値で見るとかなり増えているのではないかなと思う。地域住民の方々は研修会や公式な資料等ではなく、目で見て、活動等が見えるかで判断してしまう傾向があると思う。地域に根ざした福祉事業や、当事者の方々が地域の中で行事に参加するというのは、地域住民に見える化をするのであれば非常に大切だと思う。

ネットワークの話について、宗谷管内は広く移動距離もある中、福祉事業者同士のネットワークやつながりは、研修会等で色々あると思う。実際、当事者と福祉サービス事業所、各市町村の中でも交流や意見交換等のサービス体制ができていると思う。

宗谷管内は、市である稚内市は色々な福祉サービスが整っているかなと思うが、一方で町村は福祉サービスが全て揃っているわけではない。その中で、町村で暮らす当事者が必要なサービスを受けるために、色々な場所に移動してサービスを受けた時、当事者のいる市町村と、当事者が使う別の市町村の事業所との連携がなくて大変なこともあった。

自立支援協議会や福祉調整会議等で困難事例や対応を協議していく中で、自分たちの町だけではサービス不足なところが課題となっている。

また、町村に住んでいる方が稚内市のショートステイを利用することについて、町

村と稚内市のショートステイ事業所のネットワークが薄いと、なかなかサービスの提供に至らないケースがある。中で調整している相談担当者が苦勞しているのを何件か見ている。

〈大谷推進員〉

緊急性のあることだったりすると、すぐつなげたいというのはある。

〈高師委員〉

稚内市は市だから（サービスが揃っている）という話をいただいたが、豊富町や幌延町のサービスを稚内市の住民が利用している部分も少なくない。市内にないサービスだからである。

例えば就労継続支援B型一つとっても、豊富町でやっているような事業であれば参加したいという方はかなりいる。実際に隣町のグループホームに入りながら生活を送る方もいる。先程のショートステイについても、結局のところ、稚内市も基盤が充実しているわけではないので、高齢者のサービス基盤を利用して、一部を使わせてもらっている。

市内の方ですら、なかなか思うように使えないというところがある中で、他の町村からのご依頼に応えきれない部分があるかと思う。

それから、障がいを持ったお子さんが年齢を重ね、稚内市内の就労継続支援事業はB型のみだが、やはりいろいろな就労支援サービスがある都会でないと、この地域では暮らしていけないと考え、親も含めて転出する方、子どもさんだけ転出する場合もある。

稚内市はまだ恵まれていると思うが、この地域は、十分な基盤が整っているとは必ずしも言えないと感じる。

〈大谷推進員〉

稚内市内から少し遠い、管内の町村にいろいろお世話になっている方を、私も知っている。資源がないと言っているけど仕方がないので、そこを何とか代わりになるものがないだろうか、工夫したらどうかならないか、将来的にはいろいろあると思うが、当面できることを、知恵を出し合ってやっていけたらなと思う。

〈影山課長〉

市町村自立支援協議会、社会資源の開発とか改善っていうのも、そもそも市町村の自立支援協議会の大きな役割の一つと思う。管内全部の市町村には協議会はないような状況。あってもどうだろう、動きとしては。

冒頭の挨拶でも言ったが、ここは基本的には市町村だけでは解決できない、広域的な課題を協議するような場。ここでも解決できないようなものは、親会の北海道障がい者が暮らしやすい地域づくり推進本部に持って行くみたいな形になっている。

稚内市さんは、結構活動されているという話だと思うが、他の町村はそもそも自立支援協議会自体がない町村もある。地元に住んでいる障がい者が地元で使いたいサービスが無くてよその市町村へ行く、クロスしているような現状もあると思うが町村の自立支援協議会は機能しているかどうか。

そういった各市町村の自立支援協議会に対して、我々も働きかけるなり、コーディネーターさんもいろいろ活躍されて、委員にも入っているようだが、地元の社会資源の検討、なかなか人が集まらないという部分もあって、小さい町村で新たに事業所を作るとするのは非常に難しい部分があると思うが、ではどうするか、稚内市さんのサービスを使うなり、もっとスムーズにサービスに繋がる体制をどうするかというのは、基本的にはその地元の市町村の自立支援協議会に認識してもらって、

考えていただくべきというのは、1つある。

コーディネーターの方に動いてもらって、どんどん誘い込んでいただいて、動きがないところは、本日いただいたご意見も踏まえて、今後道としても活動するような形になると思う。基本的にはまずは、市町村、地域住民の相互理解もそうだが、行政側も含めて、考えていただければと思う。

〈大谷推進員〉

市町村の自立支援協議会もそうだし、この地域づくり委員会もやはり、会議をしたらいい、ではなく、課題を自分のこととして考えていける会議だったらいいと思う。

いつかは、とか将来的な話はいくらでもできるが、すぐ目の前にお子さんがいるとか、本当に今あることを、すぐ対処できないかもしれないけれど、少し行動早くとか、自分のこととして考えたり感じたり、助けてもらおうなどしたいなと思いながら、私は参加している。

そのうちあったらいいよね、とばかりになっている自分も反省しながら、自分のこととして考え、やっていきたいと思う。

〈高師委員〉

稚内市の行政面積は本当に広くて、日本で一番狭い香川県の約半分の面積。確か宗谷管内全部合わせると、長崎県と同じぐらいだったかと思う。一つの県に匹敵するぐらいの広い土地の中に8万何千の人口が点在するという地域性でのため、どうしてもいろいろな機会が、北海道の中でも道央圏や中核市の旭川圏内とか、そこにいろんな資源もあるけども、限られてしまっている。

一応、エリアとしては道北として旭川や名寄に、障がい者福祉の拠点もあるが、実際、相談に行けるのか、使えるのかというと、なかなか難しい。

また、行政の職員も、事業所の皆さんも、関わっている皆さんも、何かの機会でも勉強したいと思っても、研修すら行けないような地域性だと感じている。

先程、市町村・事業所間の連携の話もあったが、こういう時期だからリモートとかの方がいいかもしれないけれども、自治体の職員だったり、自立支援協議会であったり、或いは事業所の皆さんであったり、宗谷管内に何らかの場があって、横のネットワークができた方がいいと感じた。

私が担当しているいろいろな研修する時に、町村に必ず声をかけさせていただくことを心がけている。例えば精神発達障害者、仕事サポーター養成講座、強度行動障害の研修やるよとなったら、必ず声かけをさせていただいた。

来月8月29、30日の土日には、ペアレントメンター養成講習という、発達障害のお子さんを養育する今まさに困っている親に、先輩のお母さんたちが相談対応するための講習が開催される。ペアレントメンター制度は北海道が推進しているが、日高と宗谷だけが取り残されていて、今年ようやく稚内市で開催することが決定した。

この案内もすべての町村の皆さんに届けたいなと思って、まず役場に届けようと思っているし、教育方面にお届けする働きかけをしようと思っている。ネットワークってというのは市内はもちろん、管内市町村間でも強められたらいいなと感じている。

(ここで加藤委員が遅れて到着する。辞令交付)

〈大谷推進員〉

昨年からの2つのテーマ、「就労支援」と「相談体制の整備」に加えて、本年度は、「障害児者と地域住民の相互理解」ということも、テーマに加えて協議してい

きたいということで、皆さんからご意見とか感想とかいただいているところでした。

加藤委員は、学校の、教育の方からの選出ということで、来てすぐで大変申し訳ないですが、自己紹介含めて、日頃思っていることをお聞かせいただけたらと思います。

〈加藤委員〉

稚内市立港小学校で特別支援学級の教員をしている。ここ十数年、特別支援学級に携わり、気づかずに過ごしたことがたくさんある自分を持っている自分ということで、役に立つことがあるかなと思う。

柱に沿って話す準備はないが、先程のご発言に関わり、ペアレントメンターということで、特別支援学級を初めて持った時から、親御さんと、障がいを持つお子さんだけではなく、同じ学校にいる兄弟たちのメンタル、関わりも大事にしながら、そういう取組みをされている地区もあると聞きながら、保護者の方やご家族の方、それから子どもたちと接している。

稚内には、「いいよの会」という、発達障がいの子どものための親御さんが中心の団体がある。運営は今は小学校特別支援学級の教員になってしまっているが、発達障害を持っている子どものお母さんたち何人かが、自分たちの語れる場を、思っていることを具体的に話せる場を、自分たちのことを発信する場を、ということで作られた会と聞いている。その方々が今、相互のサポート、後輩のお母さんたちへのサポートを積極的にされているように感じている。

8月29、30日のお知らせは、やはり教育局から教育委員会でしょうか。

講習を待っている方もたくさんいるが、ただお知らせを配っても、お母さんたちの扉を開けるのはなかなか難しい。例えば、小、中学校であれば担当の先生のサポートをプラスすると、その扉が開くかなと思って聞いていた。

〈大谷推進員〉

親御さんと兄弟のメンタル、関わりも大事にするっていうのは、なるほどと思った。言われてみればそうだと思うが、気づかないでいることがいっぱいある。

〈加藤委員〉

どこかで誰かと手をつなぎたいと思っていたが、兄弟は、親にも言えない。自分自身でもなかなか認めてあげられない気持ちを抱えている。思春期超えたらちよつとつらくなる子もいる。障がい児とたくさん関わりを持ち、共に時間を過ごしている兄弟にも、ぜひ、扉が開けばいいと思う。

〈大谷推進員〉

次の委員会は秋になるので、今のうちになにかを投げかけておいたら、委員の皆さんはそのことを考えてから、次の委員会に参加しようと思うかもしれないし、委員会を待たず事務局にこれってどうなのだろうというふうに聞くのもいいと思う。何か思うことがあったら、出していただいて次につなげていけたらと思う。

〈影山課長〉

さっきの補足というか、自立支援協議会の社会資源の話で語弊がある部分があったので、当然地元で足りない不足しているサービスがあるっていうのは、自立支援協議会で意識していかなきゃならない話だが、実際、現実としてクロスしている部分は、もう完全に、自分の市町村だけじゃ解決できなくなっていると、広域的な課題なのだろうなということ。何もしないで現状そうになっていると言うのではなくて、それを言わなくてもわかっている、うちの町にそのサービスがあれば一番いいけれども、だからと言って就労継続支援事業所をA型もB型もうちの町にどうやっ

て作ったらいいの、作ったって全部利用者が来るわけでもないし、そもそもスタッフも集まらないという、いろいろな課題が当然ある。

ではそうなったらってということで、よその町、隣町のサービスを利用する実態となっていると思う。それは当然、市町村が自立支援協議会でもそういった現状を認識していると、それはちゃんと意識して欲しいなっていう意味で、言いました。

〈大谷推進員〉

何かご意見のある方は。

〈影山課長〉

本当に課題が非常に多くて、どれから手つけたらいいかと思うが、今回提案いただいた、新たなテーマとして、地域住民の相互理解、ということで、例えば今後何か、委員会として、啓発事業的なイベント、研修会でもいいのかもしれない、それらをやるということであればやったらいいのかと。

その時に、町村にも当然声かけして、やって見せるではないけれども、協議会の話だってそうです。進んでいるところの話を、コーディネーターさんがどんどん情報提供して、こういう形でやっている、こんな話をしていると、どんどん背中を押して、いい協議会、形だけではなく、ちゃんと議論するような協議会になっていただければいいと思うし、この相互理解のことにしても、この場だけで話し合っているだけではなくて、何かやった方がいい。実際、コロナなどあるので、なかなか人が集まってということがちょっと難しい部分もあるのかもしれないが、地域づくり委員会として今後検討していてもいいのかと思っている。

〈大谷推進員〉

地域づくり委員会について発信していきたい。一般住民は地域づくり委員会って何？何するところ？という状態。私が2年前に推進員になった時も、仕事では関わっていたつもりではいたが、皆に知られているとか、どういうことを協議しているのか、わかっていなかった。市町村で対応しているから、それ以上、他で協議することがないと思っていたが、もしかしたら、あるような気がする。

それこそ教育と福祉の関係で加藤委員も思っていることがあると思う。教育と福祉が繋がって1人の人を見ていくことには、絶対関わっていかなくちゃいけないことなので、そこをうまく調整したり、連携できたらいいと思う。

〈高師委員〉

影山課長から、何か事業一つやってみるっていうのもいいきっかけづくりだとおっしゃっていただいたが、現実的には予算が伴うものは厳しいかと。

〈影山課長〉

厳しくはない。何をやるかにもよる。例えば全国的に有名な人を呼んで何かやるとなったら、謝金だ何だと、すごいお金がかかるが、お金をかけない範囲でできるものもある。

我々のメンバーの中でいろいろご協力をお願いする部分もあるけれども、お金をかけないでできるものとか、場所ならいくらでもあると思うし、場所代や若干の講師の謝金程度であれば、本庁に掛け合えば何とか、調達できる部分はあると思う。

〈高師委員〉

可能性があるなら、相互理解に絡めて、何か事業が一つできたら、皆さんに向けて情報発信になると感じた。お金をかけない情報発信というと、何か委員会の活動ニュースとして、本当にA4の1枚とか2枚とかをホームページに貼るような形で、ちょっとした皆さんに知って欲しい情報を出せば、結構興味深く見てくださる方もいるかと思う。

秋までこの委員会がないと、皆さんと議論を深めるっていうこともなかなか難しくなってしまう。そこはちょっと懸念されるが。事業なり情報発信なりをできたらいいなという。

〈大谷推進員〉

事務局の課長の方から、予算面は何とか掛け合うという話もいただいた。何か発信したいという気持ちを何とか表したいと思う。情報として知らせたいことがあれば、私たち推進員と委員も、個別にでも事務局に何らかの情報を伝えないと、任せきりにはできないと思う。

〈影山課長〉

知恵をお借りして、事務局の方にお知らせいただければと思う。推進員、コーディネーター含めていろいろ相談、検討して、ただ、集まって話して公開していますだけでなく、何かできることを。そこに今まで来たことのない親御さんなり、関係者なり、子どもも大人も含めて入ってもらって、障がいというものを知ってもらう機会が、一つでも増えたらいいと思う。

〈木上委員〉

いろいろな話を聞いて、皆さんいろいろと障がいのことを考えてくれているのだと言う気持ちになりました。私も今車椅子で、難病を抱えての形で、委員として携わることは何かの縁があるなという気分。資料全部読んで、頭の整理をして、今度の委員会はいろいろと言いたいので、聞いてもらいたいと思います。

〈大谷推進員〉

最後に資料読みながら次の機会に、と言っていたいて、本当にありがたいなと思っている。

〈小田桐委員〉

木上委員にお話いただいて、実際にハンディキャップ抱えられている方が生きていて、どういうところがどうなったらいいといったことは、当人が一番感じると思うので、そういったご意見をこの委員会に委員として参加してもらって聴取できるのが、大きいと思った。

想像でしかわからない障がい者と接して、自分は何か差別とか偏見持っているつもりないって言っているけど、実はそうでない部分もあるかもしれない。

ここの集まった人とのネットワークを生かして、何か行動しなければいけないという気はしている。年間に開催できる回数とか、予算とかの問題があると思うけど、委員会だけを年に1～2回やっても、しょうがないと思うが、この委員会が何をやっているのかということ周りに認知してもらうのは、ちょっと難しいとも思いました。

〈大谷推進員〉

今、集まっている委員の方と事務局と、新たなネットワークを築いていけたらと思うことを、それぞれの委員さんに相談させていただきたいと思う。

(閉会)